talk! talk! talk! 落語家・春風亭昇太さん

落語家

春風亭昇太さん

TBSドラマ「タイガー＆ドラゴン」のヒットなどにより、落語ブームと言われる昨今、その中でも今後の落語界をになうニューリーダーとして期待されているのが、実力派としても知られる落語家の春風亭昇太さんだ。創作落語を始め、現代的な解釈で楽しませる古典でも高い評価を集めている。一方で趣味人としても知られ、カメラ趣味もそのひとつ。旅をする事が多い仕事柄、旅先で撮ることが多いと言う写真。今回はその面白さや魅力についてたっぷりとお話いただいた。

プロフィール

しゅんぷうてい・しょうた。1959年、静岡県生まれ。1978年、東海大学に入学し落語研究会に入る。1982年、春風亭柳昇のもとに弟子入りし、昇八という名前をもらう。1986年二つ目に昇進、1992年、32歳で席亭推薦による抜擢で真打となる。
隔月で発表する新作落語の創作活動に加え、独自の現代的な解釈で取組む古典落語の会を積極的に開き、古い落語の価値観にとらわれない若い観客層を増やし続け、第55回文化庁芸術祭の演芸部門大賞受賞を始め、数々の賞を受賞している。新作・古典を問わず高い評価を集めている実力派真打。さらに、演劇・音楽など、ジャンルを越えた交流も積極的に行い、2005年には落語をテーマにしたドラマ「タイガー＆ドラゴン」（TBS系）に出演し演技指導も行った。また「笑点」の大喜利メンバーとしても活躍するなど多方面での活躍を続ける。
次世代を担う落語家ユニット「六人の会」（春風亭小朝、笑福亭鶴瓶、立川志の輔、林家正蔵、柳家花緑）のメンバー。

Beginning 出会い

カメラには　つい触れたくなる魅力がある

最初に写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

カメラはずっと好きだったんですけどね、お金がないからちゃんとしたカメラを買うことができなくてずっと簡単に撮れるやつを使ってたんですよ。そのうち落語家になると、落語家って仕事で地方に行ったりして旅が多いんですよ。各地でいろいろな風景に出会ったりしますから、それでちょっと本格的にやってみようかなということでちゃんとしたカメラを買って撮るようになって。それがだいたい、10年くらい前ですね。

どのようなカメラを使っているんですか？

デジタルカメラはD70を使っています。あと、古いカメラが好きなんですよ。カメラ以外にも古いものが好きで集めたりしてるんですけど、古いカメラはなんとなく使い勝手が悪いのがいいというか（笑）。
僕はもともとメカ好きなところがあって、カメラ自体も好きなんですよ。自分でいじったりするわけではないんですけど、カメラって見た目が綺麗じゃないですか。古いカメラもそうだし、もちろん今のカメラも。物としてすごく完成されている感じがして、触りたくなるんですよね。そこにポンってカメラが置いてあったら、誰でも絶対に触るでしょ？（笑）触らない人っていないですよ。触ってシャッターを押しちゃいますよね。カメラってそういう魅力があるんですよ。

ええ、わかります。カメラの持つ雰囲気に惹かれるんですよね。

はい。でもね、魅力的だからこそ深いところまで行かないようにしてるんです。凝り出したら楽しくてキリがなくなってしまいそうで恐い。だから、今は浅いところで楽しんでますよ（笑）。

ずっとカメラが好きだったということですが、それは子供の頃から？

そうですね、興味はありましたね。親も小さいころによく写真を撮ってくれたんです。ブローニーサイズの、蛇腹のカメラで。そのカメラはもらって今僕が持ってるんですよ。撮ってみたんですけど、なかなかうまく撮れなくて面白いです。
それから、学校の遠足や修学旅行にはみんなハーフカメラを持っていきましたね。あと大学時代はポケットカメラ。110判のフィルムで撮るやつを使ってました。……そう言えば、丸いカートリッジみたいなものを取り替えるカメラもありましたよね。すぐ無くなっちゃたけど、ディスクカメラっていうんでしたっけ、あれも持ってたなぁ。

（笑）カメラの移り変わりの歴史をたどっていらっしゃるような。

そうです、そうです、そういう時代を過ごしてきましたよ。だってデジタルカメラが出たときも買いましたからね。こんな便利なものがあるのか！すごーい！って言って使っていたんですけど、画素数は10万画素しかないの。今では考えられないですよね。携帯電話ですら200万画素以上あるのに。しかも、何を撮ってもはめ込み画像みたいに写るんですよ。奥行きが無くて、撮っても全部合成写真みたいなの（笑）。
デジタルカメラも当時はかなり珍しがられましたけどね、それが今ではそっちが主流になるくらい普及してますよね。すごい時代になったなぁと思いますよ。

Pleasure 楽しみ

デジタルは便利で気軽　フィルムは写真が上がるのを待つのが楽しい

写真はやはり、旅先で撮られることが多いのですか？

そうですね。旅に行くときには必ずカメラを持って行きます。実はその写真をスライドにして、お客さんに見せながらあれこれしゃべるという“旅ライブ”のようなことをずっとやってるんですよ。それで、以前はスライドにするためにと思ってポジで撮影をしていたんですけど、今はもう、デジタルカメラが便利で。旅に行くときには基本的にデジタルカメラを使ってます。扱いも楽、編集も楽、それに写真の管理も楽でしょ。

編集までご自身でされているんですね。

もちろんやりますよ。デジタルカメラだと本当に簡単ですよね。パソコンに取り込んで、ソフトでパパッと編集できちゃう。音楽をつけたり、タイトルをつけたり、あっと言う間ですからね。ポジで撮っていたときは、ライトボックスの上でどれにしようかなぁなんて1枚1枚ルーペで覗いたりして、フィルムを切って、ひとつずつマウントにパチンと入れてってやってましたよ。たまに夜中に作業してるときに眠くてぼんやりしちゃって「あぁ！　フィルム切り過ぎた！」なんてやってました（笑）。

でも、もともと僕はポジって好きなんですよ。発色がいいから、ライトボックスで見てると自分が写真うまくなったような気持ちになるじゃないですか（笑）。あれで見ると、なんでもちゃんとしてるように見えちゃう。綺麗だなぁって。

では、フィルムで撮影するときもあるんですか？

もちろんありますよ。僕はそれぞれ、両方好きなんですよ。デジタルカメラの便利さと気軽さ、フィルムカメラの面倒なのと撮ったときの感覚が心地よいのと。だから、仕事で使うとなると圧倒的にデジタルカメラだけど、休みの日にのんびりなんてときは古いカメラで撮るのがいいですね。普段、仕事や仲間内で撮る時はデジタルカメラデ簡単にパッと撮れた方がいいじゃないですか。でもゆっくりしたいときはマニュアル機で、露出も目測程度で測るような古いカメラで、時間をかけて撮っています。

撮っていて一番楽しい、面白いと感じるのはどんなところですか？

デジタルカメラはバシャバシャ撮りまくって、見て消してまた撮って、そうやって撮影できるのが面白い。フィルムカメラの場合はね、写真屋さんにフィルムを出してから戻ってくるまでの時間がいいんですよ。待ってる間が楽しいですね。特に古いカメラは言うこと聞かないでしょ。だからどういう風に写ってるか想像がつかないから余計にワクワクしますよね。それで、思いのほかよく撮れたりすることってたまにあるじゃないですか、素人でも。そういうのがあるとすっごい楽しいです！

ライトボックスで見ながら。

そう、見ながら「お、完璧だなこれ、キタんじゃないのー！」って独りで言ってる。「どうしてこんなにうまいんだろう」とかね（笑）。そういうのは全部たまたまです。どうやって撮ったかなんて覚えてないですよ、偶然撮れた写真だから。でもその偶然があるのが面白くてね、1人でキャーキャー言ってますよ（笑）。

Photo's 作品紹介

旅先で出会った風景と　ユーモア溢れる志の輔さんスナップ

1　隅田川下流にある佃島のマンション群（東京）

夕方、ぶらぶらと歩いていたら雨が降ってきて、佃島のマンションがもやっとして見え思わずシャッターを切った。

2　志の輔、地元のおじさんと手を比べる（キューバ）

3　志の輔、地元のおじさんと太極拳をする（中国）

4　絵になるカウンター（キューバ）

キューバのバーはかっこよくて、どこを撮っても絵になる。とりあえず適当に撮ったのに、こんな風にかっこいい。

5　行儀のいいタンポポ（千葉）

仕事で行った千葉で。何気なく目に留まったタンポポだけど、なんでこんな綺麗に並んでるんだろう。

6 世界遺産で遊ぶ子供（カンボジア）

アンコールワットに行ったとき、池にかかる橋のところで遊んでいた子供。カメラを意識してるのかしていないのか、とってもナチュラル

Future これから

カメラは長く　生涯続けられる趣味

昇太さんにとって写真はどんな存在ですか？

まぁ、仕事で使う事もありますけど、写真は純粋な趣味ですね。なんかね、ごちょごちょいじってやってるのが好きなんですよ。写真を編集するのも好きだし、それに1人で没頭してるのが楽しくて仕方ない。

落語もご自身で噺を作って演出をして、1人で全てやるというスタイルを取られていますよね。

噺を作ってもらったり人にお願いしてもいいんじゃないの？って言われるんですけどね、いちいちどうやりたいかを説明するのがもどかしいんです。その時間があるのなら自分でやったほうが早いなって、そういう気がしてしまって。もともと人と何かをやるのが苦手なのかもしれません。落語は1人でできちゃうものですからね、自分の目の届く範囲でやるのが好きなんです。だからカメラも手を広げずに、ギリギリ、自分でコントロールできる範囲の趣味に止めておかないといけない（笑）。

気楽に楽しくできる範囲で。

そうです、そうです。でも、写真って本当にいい趣味だと思いますよ。だって年齢を問わず、ずっと長く続けられるじゃないですか。定年退職したおじさんたちが退職金でカメラを買ったなんて話、よく聞きますからね。おじさんたちの若い頃は、カメラなんて今じゃ考えられないような値段でしたからね。よく、うれしそうに「これ最近買ったんですよ」って自慢されるんでね、「おぉ、いいですねー」ってその度に言ってますよ（笑）。

そういう意味でも、昇太さんも長く、おじさんになってもおじいさんになっても続けられますね。

そうですね。長く続けていきますよ。これからどんどん、カメラの技術も良くなって、旅先でもかさばらない、軽くて高性能のカメラなんかできていくとうれしいですね。旅に出るときカメラ関係の荷物がかさばってね、それだけが大変で（笑）。

そういえば旅先の写真ということですが、昇太さんの写真を拝見すると人物写真が意外と多いですね。

そうですね、（立川）志の輔ばっかり写ってるでしょ。彼とは同期なんですが、よく一緒に旅行に行ったりしてるんですよ。そうすると一緒にいるからよく撮っちゃう。それに志の輔カメラ持ってこないので、僕のカメラしかないの。「はい、ここで1枚撮ってー」なんて要求してきて、たまには僕の写真も撮れよ！って思うんだけど（笑）。まぁ、面白いことをしてたりするので勝手に撮って楽しんでるんですけどね。たぶん、志の輔写真集ができますよ。

なるほど（笑）。いいモデルになっているわけですね。

でも、最近はお互い忙しくてなかなか一緒に旅に行けてないんですよね。そういえば旅ライブもしばらくやってないんですよ。だから今後やりたいこととしては、また旅ライブができたらいいですね……の前にまず、旅に出たいですね（笑）。

› コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.